

帝国農会幹事 岡田温⁽⁵⁾

—— 愛媛県農会技師時代^③ ——

川 東 埤 弘

目 次

はじめに

第1章 大正2年

第2章 大正3年

第3章 大正4年

第4章 大正5年

第5章 大正6年

第6章 大正7年（以上本号）

は じ め に

前稿¹⁾で、帝国農会幹事・岡田温（おかだ ゆたか）の愛媛県農会技師時代（明治38年5月～大正10年4月）の活動のうち、明治42年から45年まで考察したが、本稿では、大正前期（2年～7年）の温の活動について考察していくこととする。なお、残念ながら大正前期の「日誌」は2、4、5、6年の4ヵ年分が行方不明で欠落しており、十分考察できないが、他の文献で補い、考察していくこととする。

第1章 大正2年

大正2年(1913)、温42歳の年である。愛媛県農会技師の活動を続けている。

1) 拙稿「帝国農会幹事 岡田温⁽⁴⁾—愛媛県農会技師時代^②—」(『松山大学論集』第17巻第2号, 2005年6月)。

しかし、本年の「日誌」はなく、その活動状況は不明である。ただ、『愛媛県農会報』ならびに岡田慎吾『愛媛県農業発達史』（愛媛県高等農業講習所、昭和43年）等があるので、それらにより本年の温の農会活動の一端を見てみることにしよう。

本年1月27、28日の両日、愛媛県農会の臨時総会が開かれた。それは、愛媛県知事交代に伴う県農会長人事であった。愛媛県農会長を兼務していた伊沢多喜男²⁾は、前年の大正元年12月30日、新潟県知事に転出し、代わって、深町練太郎³⁾（大正元年12月30日に就任）が愛媛県知事に就任していた。そして、本年1月4日、伊沢が県農会長を辞任し、県農会長が空白となり、1月27、28日の臨時総会で県農会長の選出が行われた。またまた、深町知事が選出され、官僚の農会長となった。なお、副会長は鶴本房五郎（明治44年5月～大正3年3月）が引き続き務め、温はその下で県農会技師兼幹事を務めた⁴⁾。

県農会は、1月30、31日に郡農会長会を、1月31日から2月2日にかけて各郡農会技術者協議会を開催し、大正2年度の県農会の事業方針を決定している。

本年の県農会の事業は、従来からの短期農事講習会、巡回講話、町村農会への技術員の設置、原種田、桑苗圃経営等のほか、新規事業として、農家経済調査、園芸の奨励、改良農具の奨励等であった。このうち、農家経済調査は日露戦争後国民経済が急速に発達し、農業においても貨幣経済が浸透し、そのために農業問題解決の資料として、農業者の生活全般にわたり、貨幣価値をもって表示する農家経済調査が必要となり、帝国農会の命により、大正2年から実施されたものであった。帝国農会では農家経済調査委員会を設置し、委員の佐藤

2) 伊沢は、明治2年長野県生まれ。28年東京帝大を卒業し、内務官僚に。岐阜県警察部長、福井県内務部長、滋賀県内務部長、和歌山県知事等を経て、明治42年7月30日から愛媛県知事に就任し、反政友会の敏腕政治家。在任中、煙害問題の調停を行う。第3次桂内閣成立（大正元年12月21日）直後の12月30日、愛媛県知事から新潟県知事へ転出した。

3) 深町は、明治4年石川県生まれ。29年東京帝大を卒業し、通信官僚に。32年内務省に転じ、42年に愛知県内務部長に就任し、大正元年12月30日から愛媛県知事に就任。

4) 『愛媛県農会報』136号、大正2年7月、17頁。

寛次が調査様式を作成し、農業経営の純収益と家計費を把握出来るように立案した。本県では調査農家は各郡1戸の割合で中庸の農家を選定し、岡田温が指導した⁶⁾。なお、本調査は大正4年で打ち切られたが、後、大正10年(1921)から帝国農会の事業として全府県にわたって行われる農家経済調査の前身となっている⁶⁾。

3月29、30日の両日、第13回愛媛県農事大会(温泉郡農会主催)が、松山市公会堂にて開催された。中央から愛知県立農林学校長の山崎延吉を講師に迎え、温もまた、「人口問題」と題し、講演を行った⁷⁾。

県農会主催の短期農事講習会は本年も引き続き行われた。開催地・期間・テーマ・修得人数等は以下の通りであった。温泉郡余土村(7日、肥料、61人)、同郡河野村(5日、産業組合、62人)、同郡小野村(3日、桑接木、11人)、越智郡今治町(2日、桑接木、16人)、周桑郡楠河村(5日、養蚕、28人)、同郡福岡村(5日、産業組合、22人)、同郡福岡村(6日、肥料、41人)、同郡福岡村(3日、桑接木、25人)、新居郡西条町(9日、肥料・農政・産業組合、71人)、宇摩郡津根村(5日、畜産・養蚕、42人)、同郡金砂村(6日、桑接木、17人)であった⁸⁾。このうち、肥料・農政については温が、産業組合は森荘之助(農会技手)が、養蚕は土上重助(農会技手)が担当した。

本年6月、県農会事務所が松山市三番町から温泉郡道後村大字道後723番地の新築事務所に移転した。

11月15、16日、第14回愛媛県農事大会(北宇和郡農会主催)が宇和島町の宇和島公会堂にて開催された。温はこの大会で「町村農会の活動について」と題し、講演している。この大会で、知事からの諮問事項として、1. 桑園改良増殖奨励に関する適当なる方法如何、2. 米穀及俵装改良に関し適当なる奨

5) 帝国農会史稿編纂会『帝国農会史稿 記述編』383~385頁。『愛媛県農会報』132号、大正2年3月、5頁。

6) 岡田慎吾『愛媛県農業発達史』愛媛県高等農業講習所、昭和43年、6頁。

7) 『愛媛県農会報』133号、大正2年4月、32頁。

8) 岡田慎吾『前掲書』48頁。

励方法如何，が提出された。後者の産米検査についての答申は「本県の産米は乾燥調製俵装に於て特に欠点あり。今や其改良は絶対的の必要に迫られたり。然れども其方法宜しきを得ざる時は障害続出して一般農事改良に悪影響を及ぼすこと少なからざる以て慎重に攻究し，然る後着手すべきあらんも，大要左の方法に拠るを得策なりとす。一，速やかに県会を以て産米改良法を制定發布し，大正四年度より励行すること。二，大正三年度より県において該事業専任の役員技術者を置き，講話其他の方法により相当準備をなすこと。三，各官庁農会地主に於て産米改良の必要有利なることを周知せしむる手段を実行すること」という推進の答申であった。

また，この大会に愛媛県農会も 1. 産米に関する件， 2. 町村農会技術員養成の件，を議題として提出した。前者の「産米改良ニ関スル件」への答申は「産米改良ハ今や絶対的の必要期ニ迫ラレタリ」というもので，県会で産米検査法を制定し，大正4年度から実施することを知事に建議することであり，知事諮問への答申と同一であった⁹⁾。

このように，米穀検査・産米検査問題が県政の焦点となり始めた。

そのような中，12月8日，温は愛媛県技師に任命された。そして，12月11日，愛媛県内務部農商課勤務を命ぜられている¹⁰⁾以降，温は愛媛県農会技師兼愛媛県技師となり，県政にもたずさわるようになった。

温の家族のことなどについて述べておこう。温の実家の石井村南土居には，母ヨシ（嘉永4年10月2日生まれ，61歳），妻イワ（明治8年8月22日生まれ，37歳），娘の長女の清香（明治28年3月21日生まれ，17歳），次女の禎子（明治35年2月2日生まれ，10歳），4女の綾子（明治41年10月1日生まれ，4歳），長男の慎吾（大正元年8月23日生まれ，0歳），そして，温の妹シゲオ（明治28年10月17日生まれ，17歳）がいる。このうち，長女の清香は，本年南吉井村の末光徳太郎の4男・末光順一郎に嫁いだ（なお，結婚届

9) 『愛媛県農会報』第141号，大正2年12月，30頁。

10) 岡田慎吾『傘寿閑話』48頁，温の『履歴書』より。

けは翌大正3年3月6日)。

温の兄弟姉妹では、妹長女シカ(明治7年7月19日生まれ、38歳、明治26年11月浮穴村の橋栄次郎に嫁ぐ)、弟次男宏太郎(明治11年2月27日生まれ、34歳、松山市新玉町の安長キヨへ養子)、妹2女クマ(明治14年2月10日生まれ、31歳、40年3月松山市久保田の高木悌之助に嫁ぐ)、3女ケイ(明治18年1月23日生まれ、27歳、明治38年4月に新宅の岡田朋義に嫁いだが、離婚)がいた(なお、年齢は1月1日現在)。このうち、宏太郎は大阪にいた(大阪市西区三間家上三町市場北入口石山本タマ方)。

第2章 大正3年

大正3年(1914)、温43歳の年である。本年は「日誌」があるので、少し詳しく、見てみよう。また、本年は、4年からの米穀検査の実施(大正4年1月19日「米穀検査規則」の公布、10月1日実施)を前にして、8月末以降、小作農民による米穀検査反対争議が、周桑郡・新居郡で勃発し、激しく戦われ始めた年であった。さらにまた、本年は第1次世界大戦勃発の年でもある。

第1節 愛媛県農会技師・愛媛県技師活動

温は、1月4日から県農会の業務を始めた。4日から9日まで県農会直営の特別農事講習会を余土村にて開催し、温が出張し、午前10時頃から午後3時頃まで稲作改良、肥料等について講義を行った。講習は9日午後3時に終了し、直に授与式を挙行し、61名に証書を授与した。

1月13、14日には郡農会長会及各郡農会技術者協議会を、15、16日は郡及郡農会技術者聯合協議会を開催し、大正3年度の事業方針を決めている。また、17日から23日までは県立農業学校で園芸講習会が開催され(生徒170余名参加)、温は講師の農商務省の石原助熊技師をしばしば接待している。

1月30日から2月5日まで、温は伊予郡岡田村において、県農会主催の短期農事講習会に従事した。このとき、温は歯痛に悩まされながら、毎日出張し、

稲作改良や肥料についての講義を行った。2月5日に講習が終了し、直に授与式を挙げ、79名に証書を授与した。岡田村や余土村は農事の改良が著しく進み、県下の模範村として、県内外から団体視察に来るものが多かった。また、同村の改良事項はただちに県下に普及するので、特別に開講されたものである¹¹⁾。

2月、温は短期農事講習会、地主会の講習等のためによく出張した。2月10日から、温は周桑郡農会主催の肥料講習のため、福岡村丹原に出張した。前夜からの大雪で、人力車での周桑行きは困難を極めたが、翌11日10時に開会式を行い、直に温が講義を始めた。そして、16日まで講義を行い、午後に証書授与式を行った。また、講習中の14日には講義のあと、午後4時より多賀村に出張し、青年会場にて60余名に対し稲作選種及施肥法について、講義するなどもしている。周桑の講習が終わり、翌17日、温は朝6時半丹原を出発し、午後帰松した。

2月19日、温は急遽、武市の代理で、全国柑橘大会（山口県門司市で開催）に出席のため、朝8時半高浜発の第八平安丸にて門司に出張した。午後7時下関に着き、門司に渡った。翌20日柑橘大会、又、そのあとの懇親会にも出席した。だが、温は体調を崩し、21日病院に行き、診察を受けた。腎臓炎の兆候が出ていた。温はこの日、帰途につき、広島で宿泊。22日朝8時広島宇品発にて出発し、午後1時高浜着、3時前帰宅した。

2月27日、温は地主会講習のため西条町へ出張した。陸路をとり、小松に行き投宿。翌28日は新居郡神戸村に行き、同小学校における作毛品評会授与式に出席し、選種について講話を行い、終わって西条町に行った。そして、3月1日から9日まで県農会主催の地主講習会を新居郡役所楼上において行った。温は農政と肥料などについて講義した。地主の関心が高く、参加者が多かったようで、3月1日の「日誌」に「従来見サル地主多シ」と記している。

11) 岡田慎吾『前掲書』88頁。

なお、講習期間中の5日には大町村稲作品評会授与式に出席し、稲病害の講話、また、6日には玉津村に行き、同村の寺で講話を行い、7日には郡農会主催の稲作品評会授与式に臨み、産米改良に関する講話などしている。9日に地主会の講習が終わり、証書授与式を挙行し、翌10日温は馬車にて帰松した。

3月12日には、東宇和郡青年大会出席のため、宇和町に出張した。この日は八幡浜に投宿。翌13日午前、西宇和郡長を訪い、午後出発、宇和町に行った。14日宇和町での青年大会に臨み、500余名に対し、「青年の修養」と題し、講演を行った。翌15日宇和町から八幡浜に戻り、11時発の第11宇和島丸にて松山への帰途についた。

3月下旬以降、久松家の果樹園関係の業務、久松伯を迎え、接待などに従事していた(後述)。

3月28日、愛媛県農会技手の土上重助(養蚕担当)が退職し、三重県津市に転任している。温は土上と親しかっただけに、28日の「日誌」に「家族的交情ノ友人ノ離別、何トナク悲シ」と記している。

3月30日には、温泉郡農会主催の稲作増収及び共同苗代品評会褒賞授与式が開催され、温が審査長をつとめている。

4月20、21、22日、愛媛県農会の臨時総会が開かれた。会長深町鍊太郎、副会長鶴本房五郎の満期辞任に伴う役員人事であった。伊沢・深町と続いた農会長の知事兼務がようやく解消し、新会長には佐々木秀治郎(元治元年生まれ。西宇和郡宮内村、小地主、元村長、元県議)、副会長には西原英夫(明治元年生まれ、温泉郡難波村、地主、元県議)が選出された。何れも政友会であった。そして、新しく、常任幹事に門田晋¹²⁾が選ばれた。21日の「日誌」に「臨時総会。組織ニ大変動ヲ来ス。佐々木会長、門田氏常任幹事」とある。なお、門田は元県農会長で(伊沢の前の会長)、また、政友会愛媛支部の幹部であり、

12) 万延元年11月温泉郡小坂村生まれ。明治23年温泉郡素鷲村助役をへて、29年から40年まで素鷲村長。40年9月から44年9月まで県議員。政友会。41年4月から44年3月まで愛媛県農会長をつとめていた。このとき、53歳。

大物幹事の登場であった。

5, 6月, 温は巡回講話, 農業調査, 東京出張等々多忙であった。5月1日, 温は西宇和・喜多郡での講話のため出張し, 2日は西宇和郡川之石村にて, 農村改良について講話。3日は西宇和郡役所にて, 「農業と青年修養」について講話。4日は喜多郡大洲へ行き, 油屋泊。翌5日に喜多郡天神村にて, 「農事改良と農家経済」について講話。6日は同郡新谷村公会堂にて, 天神村と同様の講話をし, 終わって大洲に戻り, 油屋に宿泊。7日は大洲から八幡浜を経て北宇和郡宇和島に行き, 嶋屋に宿泊し, 翌8日から同郡来村の農業調査に着手した。14日まで調査し, 同村来応寺にて農業調査の終了報告講演を行い, 午後6時の第13宇和島丸にて帰途につき, 翌15日正午高浜に着した。

南予からの帰国後も温は種々多忙であった。20日県の督励会委員会, 22日久米村小学校にて講話, 23日来村調査の精査, 督励会委員会, 28日伊予郡の競犁会に審査長として出張, 29日県庁にて督励部評議員会, 等々。

5月31日, 温は急遽, 和歌山市開催の柑橘中央会臨席及び東京で開催中の博覧会(東京大正博覧会, 上野公園にて3月20日~7月31日)見学のため, 出張することとなった。温はこの日午前9時琉球丸にて出発, 翌6月1日午前4時半川口着。そして, すぐに和歌山に行き, 6月2日の柑橘中央会に出席し, 午後3時終わって, 大阪に帰り, 5時50分の汽車にて上京の途についた。3日夜11時半東京につき, 本郷新花旅館(博覧会の合宿所)に投宿した。4日は終日東京大正博覧会を見学, 5日は農商務省を訪問, 6日は午前は久松伯邸, 農商務省を訪問, 午後は博覧会を見学, 7日も博覧会を見学, 8日は駒場に原熙先生を訪問し, 午後は帝国農会を訪問, 9日は上京中の鶴本房五郎とともに博覧会を見学, 10日は伊沢警視總監を官邸に訪問, 11日は青山練兵場第3会場を見学, 12日は西ヶ原農事試験場を訪問し, 恩師の斎藤万吉らに面会, 等々多忙であった。13日も博覧会を見学し, その夜, 神田一ツ橋学生会にて開かれている農村研究会に参加し, 横井時敬, 斎藤万吉, 原熙の諸先生らに面会し, 夜11時新橋発の汽車にて帰途についた。15日午後3時大阪につき, 船

に乗り遅れ、神戸に行き、そこから高浜行きの日高丸に乗り、翌16日朝9時高浜に着し、帰宅した。

6月17日以降、温は種々業務に従事し、また、久松家の果樹園の大正2年度の決算書を作成したり、自作稲作の田植えの準備などした。

7、8月も、温は種々の業務や巡回講話（東予の諸村）、講習会（小学校教員等）等に従事した。7月6、7日は県庁にて農業督励部事業の会合に出席し、翌8日から東予地方への巡回講話の途についた。9日は宇摩郡金生村五明院にて、60余名に対し稲作改良、産米検査の講話、10日は三島町の宇摩郡役所に行き、午後2時より農林学校にて、50余名に対し講話。11日は馬車にて、土居村に行き、午後1時より公会堂にて、96名に対し講話。12日も同公会堂にて、110余名に対し講話。13日は新居郡角野村に行き、午後瑞応寺にて、58名に対し講話。14日は人力車にて垣生村に行き、午後2時半より同村小学校にて、60名に対し講話。終わって、西条に帰り、新屋に宿泊。15日は大町村に行き、芝居常小屋にて、120余名に対し講話、等々。そして、16日午前4時に温は宿を出て、相生丸に乗り、帰松した。

帰松後の7月18日から24日までは、愛媛県農事試験場にて小学校教員に対する農業講習会があり、温が肥料等について講義を行い、また、7月31日から8月4日まで第2回の農業講習会があり、講義した。

8月6日からは、北宇和郡教育会主任夏季講習講演のため、宇和島に出張した。翌7日宇和島高等小学校にて、7日から13日まで男女教員250余名に対し、講義を行った。14日には郡役所を訪問し、正午より郡役所にて宇和4郡の農会長会を開催した。翌15日宇和島から別府に向かい、25日まで別府に滞在し、温泉につかり、また、原稿を書くなどゆっくり休養している。26日に帰松した。

なお、8月23日、日本はドイツに宣戦布告し、第1次世界大戦に参画した。温の23日の「日誌」に「独乙ニ対スル宣戦ノ詔勅アリ」と記されている。

9月、温は農村調査、喜多郡地主会等のため、南予に出張した。9月13日、

温は喜多郡平野村ならびに北宇和郡成妙村調査のため出張した。この日は大洲の油屋に宿泊。翌14日は暴風雨が吹き荒れ、肱川が増水し、平野村方面一帯浸水となったため、仕事にならなかった。15日は平野村大字野田を、16日は同村大字平地を視察し、17日は平野村役場にて調査、18日は小学校で調査、19日は宿にて調査、精査をしている。そして、20日に小学校に村民を集め、10時半から13時半まで調査結果の報告及び反省を促す講演会を開いた。出席者は80余名であった。そのあと、温は青年会の総会にも出席し、「青年修養」と題し講話を行った。21日には10時半から大洲町の大洲公会堂にて喜多郡の地主会発会式があり、出席し、80余名の地主に対し、「地主ノ前途」について講演した。22日、温は大洲を出て、陸路、北宇和郡成妙村の調査に向かった。23日には成妙村大字曾根、能寿寺、是房を、24日に同村大字成家、大藤、則を巡視し、25日は成妙村役場にて調査、26日は同村大字黒井地、戸雁を巡視。27、28日は役場にて調査、精査をした。そして、29日に小学校にて一般講話を行い、更に地主会にても挨拶を行い、宇和島に出て、午後6時発の第13宇和島丸にて帰途につき、翌30日朝7時高浜に着した。この日温はそのまま農会に出勤し、事務をとっている。

なお、温が南予地方に出張しているとき、周桑郡や新居郡にて小作農民が米穀検査反対の運動を始めた。8月27日に周桑郡多賀村大字三津屋、9月4日同村大字北条の小作農民が集会し、米穀検査に反対し、代表委員を選び、8日には、この両部落の委員が集まり、米穀の俵装には手間がかかり、米穀検査は大地主の利益であると反対を確認し、また、同日周桑郡吉井村でも農民50名が集会し、米穀検査反対を決め、代表を選び、11日には多賀村で300名ほどの農民が農民大会を開き、米穀検査に反対し、その後も21日多賀村全農民大会、28日新居郡橘村大字禎瑞での農民大会、等々があった¹³⁾ただし、温の「日誌」にその記事はない。

13) 拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」(『松山大学論集』第5巻第2号、1993年6月)。

10月も温の出張が続いた。10月3日、農商務省より飯岡清雄が愛媛県の農会調査のため来県し、温が同行、接待した。3日、飯岡は県農会を調査し、4日は温泉郡余土村、岡田村を視察し、温が同行した。5日からは東予の農会調査に同行した。この日朝6時半の尾崎の船に乗り、今治を経て午後5時三島町に着した。この日、三島町で第15回愛媛県農事大会(宇摩郡農会主催)が開催されており、温は6日に農事大会に出席し、終わって、飯岡とともに三島町から土居村に行き宿泊。そして、翌7日は新居郡農会の調査、8日は周桑郡庄内村農会と越智郡農会の調査に同行した。そして、8日の夜11時発の船にて帰京する飯岡氏を見送っている。東予から帰松した後も、温は種々業務、雑務を遂行した。11日には来県の梶原氏とともに岡田村、余土村の視察、12日には東野の果樹栽培の視察に同行、20日には大正4年度の予算案の検討、温泉郡苗代品評会褒賞授与式に参列、21、22日には京郡府農会視察団への接待、等々。

なお、温が出張や業務に従事している10月、周桑郡、新居郡ではさらに米穀検査反対争議が高揚した。10月7日周桑郡小作農民大会(周布村密乗寺)、15日も再度周桑郡小作農民大会、周布村)、22日新居郡西部7町村の代表者の集会、26日新居郡14町村の代表者の集会、等々。そして、各町村から米穀検査実施延期の陳情書が続々出された¹⁴⁾

11月には、5日から8日まで県農会通常総会が開かれている。人事案件はなく、佐々木会長、西原副会長が引き続き続けている。なお、8日に煙害地総代の曾我部右吉、青野岩平から記念品を受領している。

11月7日、日本軍が青島占領した。7日の「日誌」に「午前七時青嶋陥落」と記している。そして、各地で提灯行列が行われ、松山市も提灯行列がなされ、8日の「日誌」にも「松山市提灯行列」「石井村仮装及提灯行列ヲ行ヒ椿社ニ集合ス」などと記している。

14) 拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」(『松山大学論集』第5巻第2号、1993年6月)。

11月12日、温は宇和、喜多5郡の産業協議会出席のため、南宇和郡御荘村平城に出張した。翌13日朝6時着船。9時から南宇和郡役所にて産業協議会が開会された。各郡長、郡農会長、技術者等が出席した。14日午後1時に終了し、小西の真珠養殖工場を見学。夜は懇親会に出席。翌15日11時深浦発の第11宇和島丸にて帰途についた。その後も、温は種々業務に従事し、18日伊予郡学事集会にて、農村青年の指導について講話、20日温泉郡検査標準米決定審査会に出席、24日県庁に出頭し、米穀検査規則を審議、30日温泉郡米券倉庫評議員会に出席、等々。

なお、温が出張や業務に従事している11月、東予の小作農民たちは、米穀検査延期の嘆願書を知事に出したが、12日に却下されている。

12月も温は出張した。12月7日、高松で開催の第5回四国園芸品評会（9日から12日まで）出席のため出張の途についた。この日午後9時高浜発、翌8日午前6時高松着。9日、10日品評会を見、11日授与式に出席。「成績徳嶋一、本県二位」であった。そして、温はこの日午後9時発第13宇和島丸にて一足先に帰途につき、翌12日に帰松した。

高松からの帰松の翌13日から26日まで町村農会講習会を開催した。中央からの講師は愛知県立農林学校長の山崎延吉であった。13日は温が3時間余り講義を行った。14日からは山崎延吉が講義を行った。18日には温も講義をした。26日に講習が終了し、午後3時より証書授与式を行い、89名に証書を授与した。

温が業務に出張に従事していた12月、米穀検査の延期を求め、知事に却下された東予の小作農民たちは、さらに運動を続け、12月18日には農商務大臣に嘆願書を提出するなどしている¹⁵⁾。嘆願書の結末は不明だが、当然無視、却下されたものと思われる。

15) 拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」(『松山大学論集』第5巻第2号,1993年6月)。

第2節 久松家の果樹園のことなど

温は、旧松山藩主・久松家から明治44年に桑原村大字東野の果樹園の開園を委託され、経営を任されていた。本年もその記事が多数見られる。

温が果樹園の現場を中川に任せていたが、その中川に不正があった。2月3日の「日誌」に、「久松別邸ニ寄り、中川君不正。事件ノ概況ヲ声〔聞〕キ、驚キ入りタリ」とある。早速、温は中川を呼び辞任を勧告した。4日「久松別邸ニテ中川君一件ノ相談ヲナシ、夜ニ入り、同君ヲ農会事務処ニ招キ明日中ニ辞任スヘク命シタリ。戒ムヘキハ不正行為ナリ」。そして、9日に温が中川の不正収受金8円余りを返還している。「別邸ニ参向シ、藤野氏以下ニ中川君ノ件ヲ陳謝シ、同氏ノ不当収受金八円十一銭ヲ返シ」ている。

3月下旬以降は、温はしばしば東野に行き、園の指揮をしていた。3月19日に河野を見習技手に、玉尾伊三郎を常農夫にすることを決め、31日には、河野や越智順三郎を指揮して、ネーブルの植え替えを行い、また、4月3日にも東野に行き、紀州温州、尾州温州を移植をしている。9日に久松伯爵が突然東野果樹園を訪問し、温が説明をしている。28日にも東野に行き、温の不在中の仕事を河野に命じている（柑橘の剪定、梨の害虫駆除、除草等）。

第3節 米麦作関係

岡田家は耕作地主である。3月20日に、温の実家の自作の前田及び前田下の麦の修理、施肥をしている。4月13日に、自作の神宮寺の麦のカキ立てをしている。

6月、麦の刈取りの季節であるが、東京へ出張していたため、記事がない。

6月下旬、田植えの季節となった。岡田家では6月26日に田に水を入れ、7月1、2日に人を雇い（留吉、つる、つるの母、およし）、田植えを行った。1日「田植ヲ始ム。大ぶけ（相徳）、前田二枚（神力）、何レモ九寸角ニテ植ヘ、且ツ大ぶけハ四本乃至五本ヲ植ヘタリ」とあり、2日「田植、苗代ノ外全部田植ヲ終了ス。一般ニ七、八分ヲ植ヘタリ。用水ハ潤沢ナリ」とある。面積は不

明だが、明治末と変わらず、おそらく7反程度であろう。

7月以降、稲の手入れを行っている。7月8日に亀次作と浦田に施肥（大豆粕）、24日に前田2枚と小田へ追肥（真粉、過燐酸）、また、除草。25日に浦田に追肥（真粉、過燐酸）、30日に亀次作に追肥（真粉、過燐酸）等々。

今年の稲の生育状況であるが、7月中旬から8月にかけて、快晴の天気が続き、生育良好であった。しかし、用水が不足した。8月5日の「日誌」に「用水大ニ減シ、越智ノ上方、星岡ノ南方白乾トナリ。北土居モ大部分溜水ナシ。東石井ハ新泉ノタメ潤沢ナリ」とあり、また、27日の「日誌」に「北土居、越智、星岡ニ、今在家村境ニ泉ヲ掘リ、吸上ポンプヲ備ヘ付ケントシ、為ニ紛擾ヲ生ス。越智ハ工事ヲ進ム。蓋シ越智、星岡ノ一部ハ已ニ三年ノ早害ナリ」とある。また、浮塵子の害、青虫の害も発生し、被害も見られた。

9月、出穂期である。9日の「日誌」に出穂期の稲作を概観している。「好天気ノタメ強固ニ出来、分蘖モ十分ナレドモ、螟虫ハ多クシテ近年ナキ被害ナリ。又、目下浮塵子モ大ニ発生シ、二回～三回ノ注油ヲナセルアリ。又青虫大ニ発生シ葉食害甚シク、其他下葉ノ枯レタルモノ多ク、昨今ニ至リ大ニ見劣リスルガ如ク思ハレ、予想ノ如キ大豊年ハ疑ハシ」と。予想ほどの豊作ではなく、虫害のため、収穫は芳しくないようである。

大正3年秋の米価は下がっている。豊作と第1次世界大戦に伴う不況のためであった。10月31日の「日誌」に「米価漸次下落シ、二俵古米上拾壹円、普通拾円二、三十銭、新米下等物九円八、九十銭トナル」などとある。

11月、稲刈りの季節となった。岡田家では11月12日に稲刈りを始めている（この日は大ぶけの稲刈り）。18日に糯を除いてすべて稲刈りを済ました。

12月4日に、稲収穫跡に麦蒔きをした。「麦蒔ヲナス。神宮寺前及前田、景清。前田下小麦（小）」。

12月11日に、初摺りを行った。しかし、収穫高の記載なく、出来ぐあいは不明である。

なお、大正3年（1914）秋の米の収穫であるが、全国的には5,695万4,905

石で、前年の5,018万5,307石に比し、976万9,598石、19.5%の増収で大豊作であった(反収は1.66石から1.88石へ増)。愛媛県の場合、米収穫高は100万6,274石で、前年の豊作104万876石に比べると少し減少していたが、基本的に2年連続の豊作であった(3万4,602石、3.3%の減収、反収も2.16石から2.05石へ減少)¹⁶⁾温泉郡の場合も26万1,150石で、前年の豊作27万543石に比べると少し減少していたが(9,393石、3.5%の減少、反収も2.61石から2.54石へ減少)、基本的に豊作が続いた。

以上、全国的には豊作であり、大正3年産の米価はますます暴落した。12月15日の「日誌」に「大阪期米左ノ如暴落ス。十二月十円七十六銭、一月十一円七十六銭、二月十一円七十九銭。正米ハ江洲高嶋米一石十円五十銭」とある。

第4節 家族のことなど

2月8日、大阪に居た弟・安長宏太郎が帰宅し、神戸にてモス店引受のため資金調達のため帰ってきた。温は翌9日、叔父の義朗と相談し、義朗と温が資金を融通することを決めている。しかし、どうも、この話は失敗だったようである。2月24日の「日誌」に「安長宏太郎へ事件進行ノ状況ヲ問合ヲナス」とあり、4月11日の「日誌」に「安長宏太郎ニ訓戒ノ手紙ヲ出ス」とある。相変わらず、弟宏太郎は温の頭痛の種であった。

3月、温の娘・次女の禎子が石井小学校を卒業し、23日に愛媛県立松山高等女学校の入学試験を受験し、合格し、4月に入学している。

4月26日、分家の岡田隆太郎家の家の新築がなされている。

4月27日、温の妹・クマが来訪し、内容不明だが、温は説諭して追い返している。この日の「日誌」に「高木クマ子、夜来訪。一身上ノ相談ヲナシ、説諭シテ返ス」とある。

16) 加用信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』より。

また、7月21日シカの夫・橋栄次郎が横領罪で拘引されている記事がある。「橋栄次郎横領罪ニテ拘引セラルト聞ク。困ツタコトナリ」。シカ夫婦の問題も温の頭痛の種であったようだ。

第3章 大正4年

大正4年(1915)、温44歳の年である。本年の「日誌」は残念ながら行方不明であり、また、『愛媛県農会事業報告』(『愛媛県農会報』の改題)も、本年は第157号(大正4年5月20日)が残存しているだけであり、温の活動の詳細は不明である。以下、不十分だが、これらにより、この時期の温の活動を見てみよう。

なお、本年は、1月19日、「米穀検査規則」が公布され、「米穀検査施行に関する告諭」が出され、10月から実施された年で、小作農民は、方針を米穀検査反対から、奨励米要求に転換して、激しく運動を展開した年でもあった¹⁷⁾

さて、本年の愛媛県農会の会長は佐々木秀次郎、常任幹事は門田晋が続き、その下で、温は、技師として引き続き活動した。

1月から2月は例年と同様に、郡農会長会、郡農会技術者会を開き、大正4年度の方針を出し、また、農事講習、農業調査等に従事していたと考えられる。

3月、温は講習に従事した。11日から22日まで12日間、東宇和郡山田村における県農会開催の特別農事講習会(農家経済、稲作、養蚕、産業組合)に佐々木林太郎(農事試験場長)らとともに講師として出席し、温は「農村改善、農業調査、農家経済」と題して講義した。

4月、温は多田隆(県農会技手)とともに、県内地主18名を引率し、県外の視察見学に出た。温らは10日の朝7時発の相生丸にて高浜港を出発。正午尾道に着き、岡山倉敷に行き、模範地主として有名な大原孫三郎家の奨農会を訪問し、小作者保護の説明を受け、翌11日は倉敷を出て、奈良に向かった。

17) 拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」(『松山大学論集』第5巻第2号、1993年6月)。

12日奈良市内を見学し、三重に向い、翌13日伊勢神宮を参拝し、四日市に向かった。14日は三重県三重郡鵜河原村に行き、仏教者として小作者保護に尽力している進士信元氏の進士農会を視察した。終わって名古屋に向かった。15日には、愛知県東春日井郡志段味村字諏訪の原の山田佑一氏の小作者保護活動を行っている共済会を視察した。終わって、木曾福島に向かった。16日は諏訪郡岡谷に行き、片倉兼太郎経営の片倉製糸工場を見学し、甲府に向かった。17日は山梨県中巨摩郡豊村を訪問し、視察。終わって東京に向かった。18日は自由行動。19日は午前農商務省を訪問し、物産陳列場を参観。昼は、松本重敏氏（新居郡出身、朝鮮で理事官を長く務めた後辞し、弁護士）の饗応を受け、午後、再度農商務省を訪問し、道家農商局長より訓示を受ける。20日は日光見学。21日は駒場の農科大学を訪問し、横井時敬教授より講話を受ける。22日に西ガ原農事試験場を参観。古在由直農事試験場長の挨拶を受け、見学の後、大隈邸に行き、庭園・温室等を参観。23日は自由行動。温は古谷久綱氏（東宇和郡宇和町出身、衆議院議員）の饗応を受ける。24日の退京を一日延期し、翌25日に東京を出発。静岡県興津に途中下車し、興津園芸試験場を見学、恩田鉄弥試験場長の説明を受ける。26日は静岡県庵原郡庵原村の杉山報徳社を参観、片平九郎左衛門氏から説明を受ける。夕方5時興津を出て、京都に向かい、27日午前4時京都着。京都を見学し、午後4時京都を出て、神戸に向かい、8時発の厦門丸にて、帰途につき、28日午後1時高浜に着いた。長い視察旅行であった¹⁸⁾

7月6日に、愛媛県農会は、各郡農会に村の農業基本調査を行うべく通牒を発している。同調査は、「御即位記念事業トシテ、…農商務省ヨリノ特別事業トシテ、特ニ本会ニ指定」されたものであった¹⁹⁾

7月以降は、農業基本調査の指導のために各郡の村によく出張したと思われる。

18) 「愛媛県農会事業報告」第157号、大正4年5月20日。

19) 岡田文庫所蔵資料より。

10月11、12日の両日、第16回愛媛県農事大会（越智郡農会の主催）が今治町で行われた²⁰⁾。当然、温も出張したと思われる。

11月8日から10日まで、3日間、愛媛県農会の通常総会が開催され、温も出席した。

第4章 大正5年

大正5年（1916）、温45歳の年である。本年の「日誌」もなく、また、『愛媛県農会事業報告』も残存しておらず、本年の温の活動状況は不明である。

ただ、幸いに「大正5年度愛媛県農会会務報告」が「愛媛県農会事業報告」第182号（大正6年7月20日）に収められているので、4月以降の温の出張、活動状況が判明する。以下、見てみよう。

本年も愛媛県農会の会長は佐々木秀治郎、常任幹事は門田晋が続き、その下で、温は、技師として引き続き活動していた。

1月に各郡農会長会及び各郡農会技術員協議会を開き、大正5年度の施設事業方針を決めた。農事講習、町村農会技術者設置、農業基本調査、改良苗代指導教師派遣、園芸奨励等。

4月、温は農業基本調査等のために出張した。2日は伊予郡北伊予村の農業基本調査に出張。5日は第17回愛媛県農事大会（喜多郡農会主催）に出張し、終わって、宇・喜5郡聯合勸業打ち合わせ会に八幡浜に出張。15日は北伊予村農業基本調査に出張。16日は温泉郡生石村に行き、講話をおこない、翌17日、19日は温泉郡浮穴村に農業基本調査のために出張。24日は石井村に農業基本調査のために出張。30日は越智郡各町村農会長会に出張。

5月も講話や農業調査に従事した。5日は浮穴村に農業基本調査のために出張。7日は伊予郡青年大会に行き、講話。8日は浮穴村に農業基本調査のために再度出張。21日は北伊予村に出張し、講話等。

20) 岡田慎吾『愛媛県農業発達史』44頁。

6月16日は新居郡における地主・小作紛擾事件のために出張した²¹⁾ また、22日にも再度新居郡に争議の和解のために出張した。

7月31日に宇摩郡での小学校教員夏季講習会に出張し、講義。

11月は、14日から帝国農会主催の全国農会常務委員会に出席のため、東京に出張。

12月は、12日より14日までの3日間、第6回四国園芸共進会が愛媛県農会主催により、愛媛県物産陳列場で開催され、参加し、終わって温は、17日から27日まで、農業基本調査のため、上浮穴郡参川村に出張を行った。

以上のように、本年の事業は、短期農事講習等のほかに、特別事業としての農業基本調査によく従事していたことが判明する。同調査は岡田温が主任で、技手の多田隆、加藤和一郎が補助し、5年度は次の13町村の調査が行われた。宇摩郡上分町、新居郡大町村、周桑郡中川村、越智郡桜井村、温泉郡石井村、伊予郡北伊予村、上浮穴郡参川村、喜多郡三善村、同郡新谷村、西宇和郡日土村、北宇和郡和泉村、同郡三間村²²⁾

第5章 大正6年

大正6年(1917)、温46歳の年である。大正6年1月からは『愛媛県農会事業報告』が毎号残っており、愛媛県農会の活動、温の活動状況が判明する。以下、見てみよう。

1月10日、11日の2日間、県農会は各郡農会長会を、11日～13日の3日間、各郡農会技術者会を、県農会楼上で開催し、大正6年度の県農会の施設事業方針を決めた。農業基本調査12町村の予定、町村農会技術者の増設、講習・

21) 新居郡の西部(西新地方)での奨励米をめぐる小作争議。西条町、大町村、神拝村、神戸村、玉津村等の小作農民は、合格米1石について1.5斗、不合格米について1斗の奨励米を要求し、田植え期に入っても田植えせず、360町歩の水田が荒廢に帰せんとするほどの紛争状態となっており、そこに温が調停に乗り出した(拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」『松山大学論集』第5巻第2号、1993年6月、参照)。

22) 以上は、「大正5年度愛媛県農会会務報告」(「愛媛県農会事業報告」第182号、大正6年7月20日)より。

講話の開催、苗代改良奨励、農具改良奨励、桑苗木成奨励、農事視察、倉庫害虫駆除奨励、等々。

1月から2月にかけて、温は農業基本調査等のために出張した。1月26日から喜多郡新谷村、五十崎村、大洲町に出張し、農業基本調査及び農事講習に従事した。2月19日からは、北宇和郡三間村、泉村、東宇和郡溪筋村、喜多郡三善村に出張し、農業基本調査に従事した。

4月も温は農事講習会、農事基本調査等によく従事した。4日より6日まで県農会主催、伊予郡での短期農事講習会に出張し、郡役所にて、佐々木林太郎（農事試験場長）とともに講師を務め、温は農業経営について講義した。また、温は16日から22日まで、農業基本調査のために、越智郡桜井村に出張した。

4月24、25の両日、役員の変更のため愛媛県農会臨時総会が開催された。新しい会長に青野岩平（周桑郡庄内村、10町歩地主、元村長、元県議）、副会長に大政正容（伊予郡岡田村、小地主）が選出された。常任幹事は門田晋が引き続き任命され、担当した。

4月26日から30日まで、温は県農会主催、周桑郡における短期農事講習会に出張し、郡役所にて「青年修養」と題し、講義した。

5月7日、農商務省主催の道府県農会技術者協議会および帝国農会主催の道府県農会常務員会（5月17日～）に出席するために、東京に出張した。27日には、上浮穴郡主催の1市3郡農事事務打ち合わせ会に久万町に出張。

6月23日は評議員会を開催。大正5年度の農会の決算、会務報告等の承認。

7月3日～6日まで、周桑・新居郡に農況視察に出張。20日農業基本調査に関する講話のために久米村に出張。

8月24日には、喜多郡大洲に出張し、高等畜産講習会に出席し、講義。終わって、同郡久米村、平野村の農会会務の視察をした。

9月2日、上浮穴郡参川村に行き、講話し、翌3日から7日まで同郡小田村にて、県農会主催の短期農事講習会を開催し、温は農家経済について講義を行い、さらに8日同郡田渡村にて農事講話を行い、9日帰松した。9月30日に

は東予4郡連合品評会視察のために宇摩郡三島町に出張。

10月10日、温は門田幹事とともに、徳島市にて開催される関西府県農会連合会（12、13日開催）出席のために出張した。14日農家副業視察のため、大阪、京都、滋賀、兵庫、広島に出張。

11月15日～17日の3日間、愛媛県農会の通常総会を開催。

12月7日、温は農業基本調査のために宇摩郡上分町に出張し、終わって、三島町に行き、県農会主催の農家家計講習会（大正6年度からの特別事業）の講師として、講義した。また、18日より20日までの3日間川之江町での農家家計講習会の講師として講義した。21日には津根村に出張。24日には、農業基本調査のため温泉郡吉井村に出張した²³⁾

以上のように、本年も農事講習会や農業基本調査のほか、6年度から始まった農家家計講習会等が中心であった。

第6章 大正7年

大正7年（1918）、温47歳の年である。本年は「日誌」がある。以下、少し詳しく温の活動について見ることにしよう。温は愛媛県農会技師のほか、大正2年12月から愛媛県技師も兼務していたが、温の提案により、愛媛県が愛媛県産業調査を実施することが決まり、本年4月8日に温は産業調査主任を命ぜられ、席も定まり、その準備に専念した。また、本年は第1次世界大戦に伴うインフレ、物価騰貴により、米価が上昇・騰貴し、米騒動が発生した年でもある。

第1節 愛媛県農会技師・愛媛県技師活動

1月4日から温は県農会事務所に出勤、業務を始めた。6日からは帝国農会

23) 『愛媛県農会事業報告』176号（大正6年1月）～188号（大正7年1月）、194号（大正7年7月）の「大正6年度会務報告」より。

の講習会に出席するため東京に出張した。この日午後7時に家を出発、愛媛丸に乗船し、上京の途についた。7日正午神戸に着し、楠公神社を参拝し、午後7時の急行に乗り、東京に向かった。だが、大雪のため、米原で13時間ほど立往生し、8日の夜の11時に漸く東京に到着した。温は妹ケイ子宅に宿泊した。9日、温は帝国農会、農商務省を訪問。10日から19日まで帝国農会主催の講習会（会場は青山農業大学）に参加した。なお、講習会期間中、温は友人などからよく接待を受けている（12日牛村一、大島国三郎ら、13日寺尾政厚、16日講農会、17日原先生等々）。20日午後7時急行にて、帰松の途についた。21日夜、第15宇和島丸に乗船し、22日帰松した。温は直ちに出勤し、23日からの郡農会長会、各郡農会技術者協議会の準備をしている。

1月23～25日、郡農会長会及び郡農会技術者協議会を開催し、大正7年度の県農会の施設事業を決めた。農業基本調査、町村技術者増設、町村農会長及び技術者協議会の開催、普通講習、桑苗育成講習、苗代改良奨励、等々。26日は公会堂にて、農会技術者及び蚕業関係技術者と合同協議会開催。

1月28日は、午前は農会、午後は県庁に出頭し、知事に面会。産業調査会の件を相談している。この産業調査会は、温の建策が容れられたもので、愛媛県の産業の実態調査（大正7、8年時点）を行う画期的調査であった。そして、この産業調査は後に愛媛県『産業調査資料』としてまとめられている²⁴⁾

なお、1月30日、愛媛県農会のもう一人の技師である川又綾之助（大正5年6月24日より県農会技師）が、家庭の都合により辞任している。

2月、温は業務や出張等によく従事した。3日、温は上浮穴郡町村農会長会及び技術者協議会出席のため出張した。この日自宅から三坂峠の下まで徒歩。そこより、迎いの車夫が来て、人力車に乗り、午後2時過ぎ久万町に着した。4日午前は山下郡長と会談。午後から郡役所にて町村農会長会に出席。5日は技術者協議会に出席した。6日9時過ぎ久万町を出発。三坂峠迄は腕車。それ

24) 岡田慎吾『傘寿閑話』41頁。『産業調査資料』は岡田文庫に収められている。

より徒歩。出口より荏原迄馬車に乗り、午後4時過ぎ帰宅した。11日は旧元日、紀元節の日で、県公会堂における町村、教育界功労者、節婦孝子表彰式に出席。14日には伊予郡町村農会長会及び技術者協議会に出席。15日～18日には県公会堂における温泉教育会主催の小学校長、農科担当教員及び町村長役場員の講習会に出席し、130名に対し、農村救済策などについて講義している。

2月20日から、温は農家々計講習会講義のため喜多郡と越智郡に出張した。この日朝8時に喜多郡に向け出発、郡中からは自動車に乗り、12時半喜多郡新谷村に着した。21、22日新谷村公会堂にて農家々計の講習会を行った。22日3時半終了し、直に授与式を挙行し、115名に証書を授与した。終わって新谷の地主・小作・自作者70余名に対し、地主・小作に対する一場の講話を行っている。同村は小作者の境遇不良にて、小作者に多少不穩の状況が見られるためであった。翌23日は喜多郡出海村に向かった。24、25日は出海村の寺にて、喜多郡農会主催の農家々計講習会に出席し、講義を行った。25日午後4時半終了し、帰松についた。翌26日には、東予に出張した。朝6時発の高浜丸にて今治に向かい、1時着し、順成舎に投宿。翌27、28日、越智郡役所楼上にて農家々計講習会を開会。28日5時終了し、245名に証書を授与した。過労の為か、温は夕刻より下痢をし、飲食物を廃し服薬している。3月1日の午前は休養したが、午後、桜井村法華寺における六町村聯合稲作多収穫品評会賞授与式に出席し、農家の自覚、自助について講義を行った。翌2日10時発の厦門丸にて帰松した。

3月も温は業務、出張によく従事した。3日は日曜日であったが、帝国農会主催の講演会準備のため、出勤。そして、夜6時、門田幹事とともに、講師の帝国農会幹事の牛村一氏と松崎藏之助博士（東京帝国大学教授）を迎えに高浜に行き、梅ノ舎にて牛村氏を招き、晚餐を行った。翌4日、県公会堂における帝国農会主催の講演会について温が接待した。午前は財部静治博士が「机上ヨリ農会員へ」、午後は松崎藏之助博士が「農村ト十九世紀ノ文明」と題して講演した。終わって、夜、鮎屋にて慰労会を行い、その夜、松崎博士を、5日に

は財部博士及び牛村一氏を見送った。

3月8日から温は南宇和郡に農家経済講習会のために出張した。8日朝7時出発、8時半高浜発の第十五宇和島丸にて南宇和郡に向かった。船中、温は講習用原稿20枚を起草している。9日6時深浦に上陸。迎えの車に乗り、直に城辺村に行き、10時半より同村公会堂にて農家経済講習会を開催。20余名に対し、講習。4時閉会。10日は、緑僧村小学校に行き、青年会及び在郷軍人会の会合に出席し、修養談を話し、城辺村に戻った。11日9時より講習会を行い、午後5時講義終了し、直に証書授与式を挙行した。夜10時前出発、宇和島に向かった。12日朝7時宇和島上陸。郡役処訪問。10時発の小船にて吉田町に向かい、さらに午後2時の馬車にて東宇和郡卯ノ町に行った。13日、宇和町小学校講堂にて開催の青年大会（第9回）に隣席し、10時より2時間にわたり修養談について講演をした。終わって、徒歩（下駄にて）にて法華津を越え吉田の宿に帰った。14日は立間村に行き、役場にて9時より農家経済講習会を開催。100余名に対し、講義。午後2時過ぎからは養蜂談。15、16日も講義し、16日4時に終了し、証書授与式を行った。17日は徒歩、宇和町卯ノ町に行った。翌18日午前9時より郡役処にて講習会を開会。各村より有志好青年130余名来会。温は気分よく、講話を行った。19日午後5時まで講義を行い、証書授与式を挙行し、6時過ぎの馬車にて出発。八幡浜に出て夜12時発第15宇和島丸にて帰松し、翌20日10時半高浜に着した。

3月22日、温泉郡における農家経済講習会を県公会堂にて開催し、温が午前10時より午後4時まで講義した。23日午後4時講義を終わり、直に証書授与式挙行。140余名に証書を授与した。

3月25日、第18回愛媛県農事大会（西宇和郡農会主催）に出席のため、八幡浜に出張した。朝7時出発。11時高浜港を出航。森盲天外、村上半太郎らと同船。風雨強く、三崎半島あたり大いに荒れ、夜9時八幡浜に上陸した。26、27日八幡浜寿座で大会が行われた。26日には馬場農商務事務官、財部博士が講演。そのあと、醜態があった。この日の「日誌」に「四時前ニ至リ太鼓

ヲ打ち、煙花ヲ揚ケ、最後ハ楽屋内ノ太鼓ヲ打ち、無礼ノ極ヲ尽シ、遠来ノ客ニ対シ本県ノ恥ヲ晒シタリ」と記している。27日午前は小学校にて東予5郡物産品評会褒賞授与式。午後は森盲天外の講演があった。終わって慰労会あり、夜11時発高浜丸にて帰松し、翌28日午前9時高浜に着した。

3月29日には、腕車にて北条に行き、11時前から小学校にて農家経済講習会を開会。翌30日も講義を行い、午後4時半終講し、直ちに証書授与式を行い、73名に対し授与した。あと、6時発の汽船にて高浜に帰った。

なお、4月1日、愛媛県農会の技師に川又の後任として、常光恭一²⁵⁾が就任している。

4月も温は種々業務を行った。5、6日は産業調査項目の研究。8日は午前苗代教師を集め注意を与え、午後は技術者養成所の生徒に講義。9日に温は県から産業調査主任の辞令を受けている。この日の「日誌」に「午前県庁ニ出頭シ、産業調査主任ノ辞令ヲ受ケ、知事、部長ト同伴ヲ談」とある。

4月11日、温は新居郡で係争中の米穀検査争議について、新居郡神戸村の小作人一色相助から解決ための要請（郡長の調停の受け入れ、硬派の谷崎保一の説伏）を受けている。その結果、14日、温は神戸村に出張した。この日の「日誌」に「新居郡小作事件ニ付神戸村ノ一色相助君郡長ノ仲裁一任説ヲ取り、硬派トノ争ヒトナリ、為ニ硬派ノ首領谷崎保一説伏ノタメ出張。午後二時前西条町着。新屋ニテ小憩。直ニ郡長宅ヲ訪問シ、郡長ノ意見ヲ聞き取り、宿ニ帰り、先一色ニ面会シ、次テ谷崎ヲ招キ面会ス。事理ヲ説イテ一色ト同一行動ヲ取ラシム。谷崎即答シ得スシテ帰ル」とある。だが、翌15日、硬派の谷崎保一も受け入れた。「谷崎、一色来訪。昨夜来徹夜協議ノ結果大体一任説トナリシ者ノ如ク、仍テ郡長ヲ招キ、四人食事ヲ共ニシ年来阻隔セル意志疎通シ大体一任ニ決ス。時ニ午後一時前。右ニテ出張ノ目的ノ達シタルヲ以テ、帰途ニ着ク」。このように、新居郡で係争中の米穀検査小作争議に関し、温が硬派を説

25) 岡山県津高郡平津村出身。明治36年東京帝国大学農科大学実科卒業。岡山県勝田郡立農学校等に勤務していた。

得し、郡長一任の方向に持っていったことが判明する²⁶⁾

4月18日、温は上京の途についた。愛媛県産業調査実施の研究のためであった。この日朝7時自宅出発。高浜11時発の船に乗り、19日午前6時神戸上陸。7時40分発特急列車にて上京し、午後8時着京。妹のケイ宅に投宿した。20日農商務省に行き、小西工務課長、佃野文書課長、副島農政課長に面談。21日は久松家の園遊会に出席。22日は内閣統計局に行き、牛塚局長、浜田富吉氏に面談。23日には農商務省工務課の小野武夫を訪問。24日には内閣統計局に行き、後藤氏に面談、25日には東京帝国大学の高野岩三郎教授を訪問。26日は農商務省に行き、農政課の小林（市場）、工務部の小野、野本、副業課を歴訪し、さらに内閣統計局を訪問。28日に女子職業学校における産業組会中央会総会に出席し、午後7時発急行にて帰途についた。29日午前7時京都下車。同8時発にて鳥取で開催の関西府県農会役職員協議会に出席のため、鳥取に向かい、午後3時鳥取に着し、記念博覧会を見学。30日も博覧会及び招魂祭を見学。午後会議があり、3時に終了し、友人と会談のあと、午後11時40分発大阪行にて帰松についた。5月1日朝8時大阪着、川口10時発の高坂丸にて松山に向かった。2日午前9時半高浜に着した。

5月6日、県庁に温の席が決まった。この日の「日誌」に「県庁及県農会出勤。県庁ニテ漸ク席室定リ、準備稍成ル」とある。以降、温は県庁及び県農会の両方に出勤し、双方の業務を行った。県庁では専ら愛媛県産業調査の準備に没頭した。まず、調査票の作成に取り掛かった。例えば、7日「県出勤。調査票ノ作成に従事ス」、9日「県出勤。終日調査事項ノ考察」、15日「県出勤。産業調査様式」等々。また、その間、県農会にも行き、種々業務を行った。

6、7月、温は県庁及び県農会に出勤し、双方の業務を遂行した。6月7、8日には米価調節反対建議案作成、21日は県公会堂にて課長、試験場長会にて食糧問題に関し討議。7月5日は郡長会議で産業調査の説明、7日は伊

26) この争議の経過等については、拙稿「大正期愛媛の農業構造(6)」『松山大学論集』第5巻第2号、1993年6月、参照。

予日々新聞に「農家ハ極度ニ米ヲ喰延スベシ」を寄稿、18、19日は県公会堂にて食糧問題等について協議。21日から温は喜多郡南久米村、上浮穴郡久万町に出張し、講話を行った。21日9時発の自動車に乗り、午後1時大州に着し、翌22日南久米村札掛小学校にて9時半より午後3時まで講義。23日も午前8時より正午まで農政について講義した。終わって、午後南久米村を馬車にて出発し、大瀬出会、上田渡を経て水口に宿泊。24日朝6時水口を出て、久万町に行き、翌25日から27日まで3日間、久万町役場にて、町村農会技術者、青年有志に対し、特別講習を行った。27日の午前講義終了し、午後2時久万町を出発し、人力車と徒歩で、夜6時過ぎ帰宅した。

8月は産業調査の準備及び各郡へ産業調査の説明のため専ら出張した。8月1日、産業調査の県訓令案を執筆し、2日に確定した。5日、知事官邸に行き説明。6、7日、県公会堂にて郡市勸業課長会議を開き、産業調査の説明。9日、産業調査委員会を開催し、調査事項に関する協議等を行った。そして、10日から産業調査説明のため、東予に出張した。この日は今治に出張し、翌11日越智郡役所にて町村長及主任技術者に対し産業調査の説明。12日には12時発の東予丸にて宇摩郡に向かい、翌13日農学校講堂にて町村長、小学校長に対し産業調査の説明。終わって、帰松の途についた。16日からはまた、産業調査説明のため、上浮穴郡へ出張した。この日午前4時40分に徒歩にて家を出て、三坂峠を越え、11時半久万町着。翌17日郡役所にて町村長会を開き、産業調査の説明。午後6時半、帰松の途につき、11時半帰宅。22日は伊予郡町村長会議に出席し、産業調査の説明。23日は喜多郡に出張。この日は郡中より自動車にて大洲に行き、小西に投宿。翌24日は喜多郡郡役所にて町村長会を開き、産業調査の説明。さらに25日には八幡浜に行き、翌26日西宇和郡役所にて町村長会に出席し、産業調査の説明。その夜、愛媛丸にて帰途につき、27日午後1時帰宅。

なお、本年8月には、米価ますます高騰し、ついに全国的に米騒動が勃発し、愛媛県でも発生した。温の「日誌」にも、その記事が見られる（後述）。

9月も温は産業調査の説明・出張等に専ら従事した。4日、市役所にて6校長を集め産業調査の説明。6、9日は職業調査集計表作成。12日には産業調査に反対している周桑郡に出張し、説得した。この日の「日誌」に「周桑郡ニ於ル産業調査ノ農学校問題ノタメ調査セサル状況ナリシヲ以テ、鎮撫ノタメ出張。途中越智氏ヲ訪フ。二時前丹原着。郡長ト会見ノ上、壬生川ニ行キ一色町長ニ面会シ説キタリ。同氏ハ反対ノ首領株ナリシガ、未タ了得ノ模様見ヘズ」とある。翌13日、温は郡役所での町村長会に出席し、産業調査の実施を依頼した。その結果了解された。「日誌」に「午前ハ風雲急ナリシモ、午後形勢一変シ、施行スルコトニ決議シ、殊ニ一色氏ヨリ其挨拶アリシハ無上ノ愉快ナリシ。畢テ大沢、越智、日野、青野、今井、郡長、飯尾諸君ト小宴ヲ催フス」とある。14日は強風、大雨のため、滞在し、15日に人力車と徒歩にて帰松した。

9月も米価は高騰し続けた。特に、愛媛は全国中、最高の米価であった。21日に温は「米問題について」の原稿を執筆。23日、農商務省より高橋書記官がやってきて、県庁にて米問題の検討会が開かれ、米穀収用令問題が議題となった。24、26日にも協議したが、米収用の決議に至らなかった（後述）。

10月も温は産業調査の説明等に従事した。1～5日は産業調査の職業調査分類を執筆。7、8日は岡田村の職業調査を行った。8日、温は高松市で開催の四国県郡農会役職員協議会に出席のため、夜10時高浜発の紅丸にて出張の途についた。翌9日6時高松着。10日に天神社図書館にて農会役職員協議会に出席し、11日は松平家の飛雲閣の参観、その後、丸亀に行き、農業倉庫の見学、更に三豊郡上高瀬村に行き、農業倉庫を視察した。終わって観音寺町に行き、藤川旅館投宿。12日は柞田村に行き、藁細工及共同販売状況の調査等をして、徒歩、豊浜に行き、汽車にて三嶋に帰り、緑屋に投宿。13日は三島の郡役所にて町村役場の主任を集め、産業調査の職業調査の説明を行った。翌14日新居浜に行き、住友鋳業所を訪問。そして、西条に向かった。15日、新居郡役所にて町村の主任を集め、職業調査の集計の説明を行った。終わって、上岡技手の案内にて、禎瑞、神戸、永見、神拝村の水害地を巡視した。収穫皆

無の地、また、一、二分作の地少なからず、惨状を極めていた。あと、周桑郡の丹原に向かい宿泊。16日、雨中人力車にて今治に向かった。そして、午後3時からの東予4郡品評会賞状授与式に会長代理として列席した。17日は越智郡役所にて職業調査集計の説明を行った。そして、午後3時発の自動車にて帰宅した。19日には、職業調査集計説明のため上浮穴町に出張し、翌、20日郡役所にて各町村主任を集め、職業調査の説明を行い、午後3時終了し、直に帰松についた。27日は内藤素行氏の歓迎会、29日は県農会にて評議員会、等々。

11月、種々雑務をした。14日は産業調査法を起案、16日は試験場にて新居郡小学校教員に対し、農村改良について講義。18～20日は県農会通常総会開会。22、23日は試験場にて新居郡教員講習講義。25日郡農会長会の準備。

11月26日、温は、産業調査、営業調査考究のため、上京の途についた。この日朝7時発第六相生丸にて尾道に行き、汽車にて東京に向かった。27日正午東京着。ケイ子宅に投宿。28日内閣統計局に行き、浜田、後藤、二階堂氏らに面会。29日は千葉県農会、千葉県庁を訪問し、漁業産業調査の説明を受ける。30日に農商務省に行き、副嶋課長、飯岡氏らに面談。12月1日はケイと食事。2日は帝国農会及び統計局を訪問。4～6日は統計局にて営業調査の研究。7日は農商務省に行き、水産課を訪問。そのあと、午後4時東京出発、帰途につく。8日12時半尾道に着し、直ちに連絡船にのり、夜、高浜に着した。夜遅く疲労甚しく、温は大和屋支店に宿している。

東京から帰松後も種々業務を行った。9日は郡農会長会の準備。10～12日は郡農会長会、及び郡農会技術者会議開催。14～16日は農業基本調査の方式の考案。18日は原蚕種製造所研究生講義のため自動車にて大洲に出張。正午着し、5時過ぎまで講義。そして、翌19日自動車にて帰松。20、23、25日は工業営業調査様式の考案。27、28日は水産業営業調査の起案。年末、年賀を書き、又越年の準備を行った。

第2節 久松家の果樹園のことなど

温は久松家の果樹園の管理を任されている。1月5日久松家別邸を訪問し、果園の前途の計画を託された。2月1日温は大正16年までの果樹園の収支予定を計算し、久松家別邸に提出している。

9月19日に久松家別邸へ行き、大正8年度予算其他の相談をし、三好の増給、常農夫賃金の値上げ、二号園番小屋の件などを要請している。

第3節 米麦作関係

本年1月は、晴天が続いた。そのため、蚕豆、麦の発育に悪影響が見られた。28日の「日誌」に「過度ノ晴天乾燥ノタメ、蚕豆ハハ、九分方漸ク発芽シタルノミ。麦ハ未ダ地上ニ表ハレサルモノアリ。発育極メテ不良ナリ」とある。

2月以降、留吉、春吉、吉太郎などを雇い、畑作物の農作業（麦修理、施肥など）を行っている（2月21日、3月7日、28日、4月5日、16日、17日、5月19日、20日、22日、24日、等々）。

4月16日に、本年度の苗代の種籾を次のごとく決めている。早生神力種を前田、小田に、相徳種を大ぶけ、亀次作西半に、神力種を浦田、前田下、亀次作東に、もちを亀次作東にであった（なお、前田、小田、大ぶけ、亀次作、浦田というのは、岡田家の耕地の名称である）。

そして、5月10日に籾種の塩水選を行い、14、15日の両日、苗代整地、種蒔きを行った。

6月、麦刈りの季節となった。岡田家では、6日に留吉、吉太郎を雇い、亀次作と前田下の麦刈り（裸麦）を、8日に留吉、春吉、おつる、要次郎を雇い、裏田、前田の大部分の麦刈りをした。また、亀次作ゲンゲ跡や大ぶけの鋤返しも行った。14日には前田の残りの麦を刈り取った。この日の「日誌」に「前田二枚麦ノ刈残ヲ刈。麦ヲ刈リシハ数年来ナカリシ。岩子、禎子ニテ麦ノ一部分ヲ器械ニテ摺ル」とある。21日に留吉、おつる、よしへを雇い、小麦を刈り取り、また、裸麦の乾燥調製もした。

6月下旬～7月初め、田植えの季節となった。岡田家では人を雇い、6月25、26日に鋤起、7月1、2日に水入れ、畦づくりを行い、7月3、4日に人を雇い、田植えを行った。3日の「日誌」に「田植。佐伯苗取百二十把。田窪ヨリ三人青年田植来り、之トおつる及森松ノ娘ガ朝八時過ヨリ（其レ迄ハ自分ノ畦作り、其レ迄ハ田窪連苗取）田植。留吉ハ畦戻シ、鋤代、苗配リ、亀次作一部切掛及肥入等ヲナス。施肥其他次ノ如シ。大豆粕ヲ黒土ニ用ユ。

大ぶけ	三日植	神力	九寸角定規	
前田	同	早神力	同上	大豆粕約三貫
前田下	同	神力	八寸三尺一寸 ハリガ子	大豆粕四貫四百匁
小田	同	同	九寸一尺定規	大豆粕約三貫
浦田	同	同	八寸一尺一寸 ハリガ子	大豆粕十二貫
亀次作	四日植	東約五畝もち 其他神力	同	大豆粕東半分十三貫余
神宮寺	同	神力	同	大豆粕六貫七畝 蚕豆跡へハ用ヒズ」。

また、7月4日の「日誌」に「田窪三人（小野源四郎、玉ノ井留吉、坂本義温）、おつるノ四人ニテ田植。四時頃迄ニ終了」とある。

その後の稲の生育状況であるが、7月10日から大雨が降り、特に12日には暴風雨ともなり、稲に大きな被害が出た。12日の「日誌」に、「各川共近年ナキ大洪水、橋ノ上ヲ流レ、勝田長太郎宅浸水。……稲水際ヨリ折レタルモノ多シ。大ぶけ夕刻稲出タルモ殆ト倒伏ス。亀次作モチ倒伏ス」とある。また、その後も天候は余りよくなかった。

8月4日に温は、自作田の稲作の生育状況を観察している。少し長いが、紹介しておこう。

「大ぶけ。七月十二日ノ暴風雨ニ、三昼夜浸水シ、然ルニ、二本植等多ク苗強壯ナラザリシタメ、大被害ヲ蒙リ、其後、植足シ、苗起シ等ヲヲナシタルモ、分蘖、發育不良ニテ全ク株絶ノモノ、二、三本株ノモノ少ナカラズ。五、六本

株ノモノハ非常ニ多ク、平年ノ七、八分作位ナルベシ。為ニ肥料ヲ施サズ。ふけニハ神力ニテモ四本位ハ必ズ植ユベシ。

前田(早神力)。中ノ出来込ニテ株揃ハズ。部分ニ不出来ノ処アリテ見苦シ。一株ノ本数多キハ十七、八本。普通十四、五本。螟虫稍多シ。前田下(神力)。子リ鋤ヲシタル為カ、田植深カリシカ、非常ノ不出来ニテ一株十本内外ノ株多シ。

浦田(神力)。相当ノ出来込ニテ、一株十四、五本ヨリ二十二、三本迄。但シ北部ノ中央ヨリ東二、三畝ハ小出来ニテ、一株十二、三本ノモノ多シ。原因不明。此部分ハ螟虫多シ。

亀次作。東ノ方五畝程糯ハ苗不良ニシテ暴風ニ折ラレ、為ニ株絶多ク、目下稍回復シタルモ、一株十本内外ノモノ多シ。其他ハ神力ニテ出来込良ク、一株十四、五本アリ。多キハ二十四、五本ニ分蘖セルアリ。但シけんげ跡地ハ他ヨリ稍不良ナリ。蓋シ基肥ヲ用サリシガ為ナルベシ。

小田(神力)。出来込良ク、全部比較的良ク揃ヒ、一株十五、六本アリ。二十五、六本トナル。

神宮寺前(神力)。出来込良ク、小田ト伯仲シ、目下ノ処平均ニテ小田ト共ニ稲頭ナリ。但シ東方中央少シ南方及附近ニテ一畝位小出来ノ部分アリ。

要スルニ、本年ハ田植以外土用初マデ天候不良ニテ、発育・分蘖後レタルガ、七月二十六、七日頃ヨリ最上ノ天候続キ、大ニ回復シ殊ニ螟虫被害少キガタメ、昨年ノ今頃ヨリハ見込良シ。而シ自分ノ手作ハ、大ぶけト前田下ト糯(五畝)ノ非常ニ不良ナルガ故ニ昨年ト結果如何ナルベキヤ」とある。

11月、稲刈りの季節となった。岡田家では、13日に栄次郎、吉太郎らを雇い、大ぶけと小田の稲刈り、15日に留吉を雇い、浦田と亀次作の一部の稲刈り、16日に留吉を雇い、亀次作の残と神宮寺前の稲刈り。21日には留吉を雇い、糯の稲刈り。17~21日に稲扱きを行っている。

11月30日に初摺りを行った。なお、収穫高の記載なく、不明であるが、おそらく不作であろう。

なお、大正7年(1918)秋の全国の米の収穫は、5,463万8,168石で、前年の不作5,448万5,658石とほとんど変わらず、2年連続不作であった(反収は1.78石から1.77石へ)。愛媛県の場合ももっとひどく、米収穫高は91万2,751石で、前年の不作95万3,550石に比し、4万799石、4.3%の減収で、さらに不作であった(反収は2.01石から1.91石へ減少)。温泉郡の場合も24万3,670石で、前年の24万1,824石と殆ど変化はなかったが、不作であった(反収は2.36石から2.37石)²⁷⁾

第4節 米騒動関係

本年は、歴史的な米騒動勃発の年である²⁸⁾温の「日誌」に、その記事が多く記されている。貴重な記事なので、少し詳しく、紹介しよう。

7月29日の「日誌」の欄外に「米価三等米庭三十五円トナル」とあり、8月1日には、「白米一升四十銭トナリ、玄米一石三十七円ヲ唱フ」と、米価騰貴ぶりを記述している。

米騒動は、7月23日、富山県下新川郡魚津町の漁民の主婦が米価高騰防止のため、米の県外への船積み中止を荷主に要求し、海岸に集まったことに発端するが、8月2日までは小規模で分散的であった。2日寺内内閣がシベリア出兵を宣言するや、翌3日富山県中新川郡西水橋町、4日同郡東水橋町、5日滑川町等へ米騒動が拡大した。温は早くも3日の「日誌」の欄外に「富山県滑川町ニ米騒動起ル。多クハ貧民ノ女ナリ」と記している。

その後も米価は上がり続けた。8月7日の「日誌」の欄外に「玄米一石四十一円トナル」とあり、8日には「松山ニテ白米一升四十七銭五厘トナル」、さらに9日には「米価最高四十八円トナル」とその暴騰ぶりを記している。

その結果、米騒動は全国に拡大し、9日に岡山市、10日に名古屋市(～16

27) 加信文監修、農政調査委員会編『改定日本農業基礎統計』農林統計協会、1977年、194頁。各年次『愛媛県統計書』より。

28) 米騒動については、井上清・渡辺徹編『米騒動の研究』第1巻、有斐閣、1959年、田村昌男・玉川信明・井本三夫『いま、よみがえる米騒動』新興出版社、1988年。

日)と京都市(～13日),11日に大阪市(～13日)と神戸市(～12日),13日東京市(～15日)等,大都市に拡大し,さらに13日～14日にかけて全国中都市に波及,頂点に達した²⁹⁾

全国の米騒動の発生について,8月11日,温は「日誌」に「米,当地ニテハ昨日五十二,三円ニナリシガ,本日八十円下落。前日来ヨリ富山県滑川町ヲ先登〔先頭〕ニ諸国ニ米騒動起ル。神戸市暴民鈴木商店及新聞社ヲ焼ク。消防夫働クヲ得ズ。パイプヲ切ル」と記している。

8月14日,ついに愛媛県伊予郡郡中町で米騒動が勃発した。町内で町民が細民救済の寄附金を集めに回っていたところ,灘町の酒屋兼米商の某が「50銭の米が何だ,夫が買えぬようなら死んでしまえ」と暴言を放ち,それが米騒動発生 of 直接的原因となった。その夜,午後7時,約300名の住民が港町の住吉神社に集まり,同酒屋宅を襲撃し,さらに20余りの米穀商や精米所を襲った。温はこの郡中町での米騒動について,8月15日の「日誌」の欄外に「昨夜郡中大暴動アリ。浜ノ漁師ナリ。徳本外十八軒ノ米屋ヲ破壊ス」と記している。また,同日の「日誌」に「余土ノ有志五,六名来訪。先日来,米価問題ニ対スル議論,傾向ニ対スル憤慨ノ談アリ。諸国暴動ノタメ,白米三十五銭売ヲナスモノ多シ。政府ノ米価下落策ハ効ヲ奏セズ。暴動ニテ効ヲ奏ス呼」とある。

8月15日,松山市・温泉郡にて米騒動が発生した。午後9時ごろ,温泉郡の素鷺村10数名の住民が岡田米穀商宅に押しかけ,米価引き下げを強要した。それに対し,米穀商は「自分はすでに細民救済のために相当の義捐金を寄付しており,米価割引の必要はない」と拒否した。それに住民が怒り,その米穀商宅を打ち壊した。さらに,松山市の小唐人町の加藤米穀店をも襲った。そして,日頃から米の買い占めをして暴利をえていると噂になっていた湊町の神谷呉服店に押しかけ,襲撃した。さらに弁天町の森川精米所,末広町の米穀取引所理事の香川熊太郎宅も襲い,門灯・門戸などを壊すなどの暴動を起こした。この

29) 井上・渡辺『前掲書』85,86頁。

松山市の米騒動について、温は16日の「日誌」の欄外に「松山市暴徒起、岡茂、神谷、森川其米屋ヲ襲ヒ、二十錢乃至十五錢ノ強約ヲナス」とあり、また、同日の「日誌」に「昨夜、松山ヲ襲ヒタル暴徒ハ今夜、石井、森松、久米ノ米券倉庫及荏原ノ渡部、白方ヲ襲ハントノ浮説アリ」などと記している。

8月22日、宇和島にて米騒動が発生した。21日の早朝、宇和島町の電柱に「米価調節協議につき八月二日午後九時鶴島町埋め立て地に集合すべし、共助団」との貼り紙が出て、22日午後7時、300人位の民衆が集まり、米商に廉売交渉しようと相談し、春日屋など11軒の米穀店を襲った。そして、その一群は日本酒類醸造会社（鈴木商店系）に押しかけ、「我々細民の糧食である甘藷の買い占めをすとはけしからん」として、買い占め中止を迫り、この頃には群衆は数千人に達した。そして、同社を放火し、全焼させた。この宇和島騒動について、温は22日の「日誌」の欄外に「宇和島暴動、酒精会社ヲ焼ク」と記している。

米騒動の勃発を受けて、寺内正毅内閣は、8月16日、緊急勅令で穀類収用令（農商務大臣は、米穀類を強制買収できる）を公布した。それを受けて、9月23日、愛媛県庁にて米問題の会議が開かれた。愛媛県は全国最高の米価であり、穀類収用令適用が議題であった。県庁内関係者、門田県農会幹事、森恒太郎、岡田らが出席した。9月23日の「日誌」に「本県ハ目下全国中最高ノ米価ニテ、其原因ハ農家ノ売惜ニ在リトナシ、農商務省ヨリ高橋書記官出張セラレ、収用令ヲ布カントシ、右ニ予メ適當価格ヲ決シ、貯米者ニ注意警告ヲ与ヘントスル事件ニツキ協議ナリシ。未決ニテ散会。明日会合ノ筈。知事、内務部長出席」とある。24日は祭日であったが、県庁からの召集により、米問題の会議を開き、温も出席した。しかし、議決にいたらなかった。この日の「日誌」に「昨日ニ次キ、会議ス。議決ニ至ラスシテ五時散会」とある。26日にも再度会議を開いた。やはり、穀類収用令の適用は見送られた。「午後、米収用問題ニ付協議。高橋農商務書記官モ出席。多少他府県ノ輸入アリ。下落ノ傾向アルヲ以テ収用ヲ決セス。形勢ヲ窺フトシテ散会ス」とある。高橋農商務書

記官とは、高橋康順である。東京からわざわざ愛媛に出張していたことがわかる。

その後の米価であるが、10月、新米が出始めたため、少しずつ低下した。「日誌」に10月18日「新米石四十九円」、10月21日「新米四十五円ニ下落」、25日「新米三十八、九円～四十円ニ下落ス」等々。

第5節 家族のことなど

温の娘、長女の清香（22歳）は、本年3月11日に照香、美雪について第3番目の子供・長男権一郎を出産している。

温の娘、次女の禎子（15歳）は、本年3月22日、高等女学校を卒業した。翌23日、温は禎子に将来のことを質している。この日の「日誌」に「禎子ニ前途ノ方針ヲ質シ、社会上ノ談話ヲナシ、但、四月上京後迄延期（裁定ヲ）ヲ言渡」とある。温は、産業調査の研究で、4月18日に上京し、農商務省や内閣統計局を訪問していたが、その間の25日に高田豊川の女子大学と市谷河田の東京女子医学専門学校、26日には共立女子職業学校を訪問し、禎子の進学先を調査している。温は、禎子に職業婦人となる道を模索していたようだ。しかし、結局、この年、禎子は進学はせず、自宅にいて、農業の手伝いなどをしてきた。例えば、6月14日「岩子、禎子ニテ麦ノ一部分ヲ器械ニテ摺ル」、11月20日「岩子、禎子浦田稲扱」等。

温の娘、3女の綾子（9歳）は、石井小学校に通っている。

温の長男、慎吾は5歳である。

温の妹のケイ（32歳）は、東京にいて、大正7年1月20日京橋大鋸町へ転宿している。7月、ケイから温にミシンの購入のため、送金依頼があったが、7月2日温は謝絶している。

本年親戚に不幸があった。6月22日に親戚の橘シズが死亡し、また、同日、分家の岡田隆太郎（明治2年生まれ）が夕方より危篤となり、11時頃死亡した。温は「日誌」に「噫」と悲しみを記している。さらに、不幸がつづき、6

月 29 日に牛淵の祖父・八木喜十郎（妻のヒサは岡田家から嫁ぐ）が死亡している。